

東京春祭 合唱の芸術シリーズ vol.8

モーツァルト《レクイエム》

曲目解説

シューベルト:交響曲 第4番《悲劇的》

11歳のシューベルトは奨学金を得て寄宿制神学校に入学する。同校はサリエリの指導下にあり、高名な作曲家との師弟関係が長く続くことになる。寄宿舎では毎日のように有志が集ってオーケストラ作品が演奏され、おもにヴィオラで参加したであろうシューベルトにとって管弦楽法のおよび鍛錬の場となった。いったん教職に就いたシューベルトであったが、その後、作曲により報酬を得る、つまり“プロの音楽家”に転じ、19歳の時に書かれたのが、この「悲劇的交響曲」だった。4本のホルンを用いた同曲は、当時としては大きな編成の作品であった。

荘重なアダージョの序奏から始まる第1楽章はソナタ形式。悲劇的な遁走のメロディを弦が奏でると、第1主題がトゥッティで咆哮し、第2主題は信号のように短い動機を繰り返す。そして簡潔かつ効果的なコーダで切り上げる。アンダンテの第2楽章はロンド形式。いにしへの舞曲を想わせるひなびたテーマは10年後、「即興曲 変イ長調」に転用された。第3楽章はメヌエット。荒々しいアクセントが打たれたメヌエットに続き、トリオでは第1楽章の遁走のメロディが明るくコケティッシュに奏でられる。ハ短調の序奏に導かれる終楽章はソナタ形式。「悲劇的」という言葉とは裏腹に、もっと軽やかな、モーツァルトの歌劇《ドン・ジョヴァンニ》にも通じる颯爽とした音楽が駆け抜けていく。

正式な初演は、作曲家の死後約20年を経て、1849年にライブツィヒで行なわれた。

モーツァルト:レクイエム

モーツァルトの絶筆となった《レクイエム》の創作過程は、映画『アマデウス』で描かれたような多くのエピソードで粉飾されているが、その真相は、昨今のゴーストライター騒動を彷彿とさせる、ありがちな話だった。自称作曲家のヴァルゼック伯爵は、匿名を条件にプロの作曲家に作品を依頼し、できあがった音楽を自作として公表、自ら演奏することを愉しみにしていた。この《レクイエム》も、若くして亡くなった妻の追悼演奏会を催すべく、モーツァルトに依頼したものだった。ただし、作曲料の半分は完成後に支払うという約束で……。

モーツァルトは死の床にあった最後の二週間も氣力をふり絞って作曲を続けていた、という義妹の証言が残っている。そして「ラクリモーサ(涙の日)」の8小節目までを書いて、35歳の作曲家は天に召された。夫の死後、残金を受け取るべく、未亡人コンスタンツェは《レクイエム》の補筆完成を画策。紆余曲折を経て、弟子のジュスマイアーがこれをやり遂げた。完成版はヴァルゼック伯爵の指揮で1793年に初演され、コンスタンツェは残りの作曲料をせしめた。

音楽は、カトリック教会のラテン語の典礼文に付されている。「主よ、永遠の安息を彼らに与えたまえ」と歌い始める第1曲「入祭唱」のみがモーツァルト自身の手で完成された部分であり、残りは大なり小なり断片・草稿をもとに補完されたものである。このように、モーツァルトとジュスマイアーの“共作”とも考えられる《レクイエム》に対し、後半の「ドミネ・イエズ(主イエス)」以降、音楽が痩せていくと揶揄する向きもあるが、今日《レクイエム》がモーツァルトの傑作として度重なる演奏機会を得ていることは言を俟たない。モーツァルト研究家のアルフレート・アインシュタインは次のように述べている。「全体を通じての印象は分裂しているが、モーツァルトの意図は明瞭である」。

全曲の掉尾を飾る「聖体拝領唱」に至り、再び冒頭部分(「入祭唱」と「キリエ」の一部)を繰り返して統一感を保持しながら、厳かに曲を閉じる。